

生誕 120 年 人間国宝 黒田辰秋一木と漆と螺鈿の旅―



黒田辰秋《朱蒔粉塗鹿花文文庫》
1925年 京都国立近代美術館

このたび、京都国立近代美術館は2024年12月17日（火）から2025年3月2日（日）まで「生誕120年 人間国宝 黒田辰秋一木と漆と螺鈿の旅―」を開催いたします。

京都に生まれ、京都を拠点に活躍した黒田辰秋は、昭和45（1970）年に木工芸の技術において初めてとなる重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された日本を代表する木漆工芸家です。その制作は、当時一般的であった分業制に疑問を持ち、図案制作、素地作りから加飾までを一貫して自身で行うもので、実用性と装飾性、素材の特性を一体化させたところに生命感にあふれた独自の創作世界を切り開きました。古典に根差したその活動は、民藝運動と関係づけて語られることが多いものの、黒田はあくまでも自身を「個人作家」としてみなしており、自身が生み出した作品ひとつが「地球と代えられる」だけの価値を有しているかということを常に問いかけていました。

本展は、黒田辰秋の生誕120年を記念して開催するもので、初期から晩年までの代表作を通じて日本工芸史に確かな足跡を残した作家の生涯および造形思考を紹介いたします。



黒田辰秋《神代樺彫文飾棚》
1974年 北海道立旭川美術館

みどころ

代表作が一堂にならぶ、黒田辰秋の生涯をたどる回顧展

1972年に白洲正子が音頭を取って編集した黒田初の作品集『黒田辰秋 人と作品』が刊行されました。最初期からの代表作を一堂に集めたこの作品集は、黒田自身が創作者としての自己の歩みを振り返ることのできる書物であると語っています。本展では、この作品集に掲載されている作品84件のうち49点を紹介します。

北海道に残る黒田の優品を京都で初公開

北海道立旭川美術館所蔵の黒田晩年の代表作で1974年に制作された《神代樺彫文飾棚》（第22回日本伝統工芸展）は同館が収蔵後これまで北海道内だけで紹介されてきたものですが、今回初めて海を渡って京都で紹介。また、北海道博物館所蔵の黒田が指導して制作された《樺テーブルセット》も北海道外では初公開となります。

初期の代表作を限定公開（京都会場のみ）

螺鈿を全面に張り付けた《螺鈿総貼小棚》（1941年）は黒田の代表作として『黒田辰秋 人と作品』にも掲載されており、本作は京都会場のみでの展示となります。



黒田辰秋《朱漆三面鏡》
1934年 京都国立近代美術館

注目作品

三面鏡3点がはじめて集結

黒田は生涯に5点ほど三面鏡を制作していたとされます。過去の展覧会では1-2点のみが展示されましたが、本展でははじめて3点の三面鏡を同時に展示します。そのうちの1点（当館所蔵）は、一時期、女優の浜美枝氏が所有し、愛用していたことを浜自身がエッセイで語っています。

黒田を代表する流稜文の手箱を朱漆に加えて拭漆も展示

流稜文の手箱は、直方体の箱の形状に合わせて渦を巻くように動的な彫り文様を施した黒田を代表する作品です。過去の黒田展では朱漆の作品のみが紹介されてきましたが、本展では拭漆による作品も展示。拭漆であることから木理や継ぎ目があり、黒田がどのように木材を用いて動的な構造を生み出したのかをご覧ください。



黒田辰秋《朱溜栗小椅子》
1968年 飛騨産業株式会社

新宮殿に納めた《朱溜栗小椅子》と《朱溜栗小卓子》の控品を試作品も交えて紹介

黒田は、1968年に新宮殿の「千鳥の間」「千草の間」用に小椅子および卓子を納めました。これは日本人としての椅子の造形を追い求めた黒田の一つの理想が実現したものでした。黒田の制作に協力した飛騨産業株式会社に残る小椅子および卓子の控品に加えて、完成前の第一、第二、第三段階の小椅子の試作品も併せて展示し、黒田がどのように自己の造形を完成させていったのか、その軌跡を辿ります。

作家略歴

- 1904年 京都・祇園生まれ。
1927年 柳宗悦を指導者として染織の青田五良らと上加茂民藝協団設立。
(1929年解散)
1928年 御大礼記念国産振興東京博覧会に特設館「民藝館」が出品され、富本憲吉、バーナード・リーチ、河井寛次郎、浜田庄司らが陶磁器を制作し、黒田は木工家具の制作を担当する。
1954年 石黒宗麿に懇請され、日本工芸会近畿支部の創設に協力する。
1955年 第2回日本伝統工芸展に出品する。翌年に正会員となり、以後、作品出品を続ける。
1958年 日本伝統工芸展の木竹工鑑査委員となる。また同展木竹部会長となる。
1964年 映画監督の黒澤明より依頼された御殿場山荘の家具セットを制作する。
1967年 新宮殿正殿用扉飾り4組および「梅の間」用大飾棚が完成する。中近東、欧州を歴訪し、スペイン・グラナダ郊外グアディスにおいて白椅子制作を見学する。
1968年 新宮殿「千鳥の間」「千草の間」用小椅子30脚および卓子10脚が完成する。
1970年 木工芸の技術において初めてとなる重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。
1982年 6月4日死去、享年77歳。

展示構成

第1部：黒田辰秋の軌跡 『黒田辰秋 人と作品』より
白洲正子が企画し、代表作の数々を掲載した作品集『黒田辰秋 人と作品』は黒田にとって作家活動の軌跡を紹介する重要なものとなりましたが、この作品集に掲載されている作品及び類品を通じて黒田の創作活動を概観します。

第2部：用と美の邂逅

1 上加茂民藝協団の時代

2年程度の短い期間で解散しましたが、黒田にとってその後の創作活動の基礎を形成する時期となった上加茂民藝協団時代。最初期の黒田がどのように自身の仕事を模索していたのか、当時の作品からひも解きます。

2 木の匠

黒田は素材を生かすことを制作の根幹に置いていましたが、ここでは主に黒田が重要無形文化財保持者の認定を受けた「木工芸」の技術による作品を紹介します。その多くは拭漆によるもので、シンプルですが非常に手間のかかるこの技術は、木材個々の特性を引き立てています。

3 漆の匠

黒田の生家は漆の下塗りを行う塗師であり、黒田も身近に漆がある環境の中で塗りの技術を身に付けていきました。黒田の塗りの作品は朱漆に代表される華やか



黒田辰秋
《拭漆櫛彫花文椅子（拭漆櫛家具セット）》
1964年 豊田市美術館



黒田辰秋《乾漆羅貝螺鈿飾箱》
1969年 個人蔵

なものが多くあります。ここでは初期の朝鮮王朝時代の家具に影響を受けた作品から、彫り、乾漆による動的な形状のものまで、木理を生かした木の仕事とは異なる塗りの仕事の数々に焦点をあてます。

4 螺鈿の匠

黒田は貝の持つ美しさに幼少期よりあこがれを持っていました。作品は現存していませんが、1923年に京都市主催の展覧会に出品し京都市が買い上げたと言われる黒田の最初の作品にも螺鈿が使われていました。黒田の螺鈿でよく知られているものにメキシコ鮑を用いた耀貝の作品があります。その重厚な輝きから「耀貝」と名付けたのは板画家の棟方志功でした。ここでは黒田がどのように貝の異なる質感を引き出し作品化したのかを、様々な螺鈿による作品を通じてたどります。

イベント 開催が決まり次第、当館 HP 等でお知らせします。



展覧会名 「生誕 120 年 人間国宝 黒田辰秋—木と漆と螺鈿の旅—」
会 期 2024 年 12 月 17 日（火）～ 2025 年 3 月 2 日（日）
会 場 京都国立近代美術館（〒606-8344 京都市左京区岡崎門勝寺町）
開館時間 午前 10 時～午後 6 時 金曜日は午後 8 時まで開館 *入館は閉館の 30 分前まで
休 館 日 月曜日（ただし、1 月 13 日、2 月 24 日は開館）、1 月 14 日（火）、2 月 25 日（火）、年末年始（12 月 29 日～1 月 3 日）
観 覧 料 一般 1,200 円（1,000 円）、大学生 500 円（400 円）
※（）内は 20 名以上の団体及び夜間割引（金曜午後 6 時以降）
※高校生以下・18 歳未満は無料*。
※心身に障がいのある方と付添者 1 名は無料*。
※ひとり親家庭の世帯員の方は無料*。
*入館の際に証明できるものをご提示ください。
※本料金でコレクション展もご覧いただけます。

主 催 京都国立近代美術館
H P <https://www.momak.go.jp/>

お問合せ 「生誕 120 年 人間国宝 黒田辰秋—木と漆と螺鈿の旅—」 広報事務局（ネネラコ内）
E-mail kuroda-tatsuaki@nenelaco.com
T E L 06-6225-7885
F A X 06-7635-7587